

# 猿新聞

編集・発行者  
山村 準  
tel:0595-63-1725  
Email  
jyun.y@asint.jp

## 増えたら駆除 減ったら保護

獣害の歴史は古く、人が農耕を始めた縄文初期からといわれていますが、文献など記録に残るのは江戸時代以降です。

江戸時代も、現代と用いる資材等は異なるものの、対策の基本的な考え方は同じで、「守る・追い払う・捕獲」の三本柱であったと思われま。

石などを積み重ねたシシ垣や、犬を放しての追い払いや、「夜守小屋」と呼ばれる不寝番小屋。火縄銃・罌の狩猟などが文献に見られ、防除の基本的な考え方は、現代と変わらなかつたようです。

江戸時代、特に目立つのは集落毎に長大なシシ垣を巡らしていたということですが、シシ垣はシカやイノシシの捕獲が目的ではなく、農耕地侵入を防げればそれでよい、という住み分けの思想があったと思われる。

その後、明治時代から大正時代初期にかけて、銃器の改良が進み、

商業的な狩猟が始まり、全国的にシカやイノシシなどが絶滅するのではないかと恐れられたほど激減しました。

そこで政府は、明治25年から平成初期に至るまでシカは捕獲禁止措置で保護をしてきました。こうした捕獲制限による保護措置と、

環境の変化もあって、やがてシカは増加に転じ現在に至っています。今、シカはこの20年間で9倍近くに増え、このペースでいくと、2025年度には500万頭に達するといわれています。

今や獣害は、被害金額にとどまらず、生産意欲の減退や作付の断念など数字では表れない影響を地域に及ぼし、大きな社会問題となり、

環境省は、「狩猟の事業化をはかる「認定鳥獣捕獲等事業者制度」導入し、平成27年5月から、すでに実施され

ていますが、増えすぎたら駆除。減りすぎたら保護。また、増えたら駆除といった、短絡的な対策をとりつづけていて、獣害は解決するのでしょうか。

まず、増えた原因を究明し、その対策を立てるべきと考えます。私達、人間を含め全ての野生動物は生態系の重要な構成員で、同じ自然の恵みを受生きているということ

を再認識し、対策を考へ直さなければならぬ時期だと思えます。

ここ数年、イノシシの被害が増加し、獣害全体によるものが84%と激増しています。

農業者の高齢化、過疎化が進む中、中山間地域の急傾斜地での防護柵設置など、防護対策は非常に困難な状況です。

イノシシの被害対策

## イノシシ対策の第一歩 耕作放棄地保全管理

この数年、イノシシの被害が増加し、獣害全体によるものが84%と激増しています。農業者の高齢化、過疎化が進む中、中山間地域の急傾斜地での防護柵設置など、防護対策は非常に困難な状況です。

の手法自体は古代からあまり変わっていません。巨大なシシ垣が、現在では簡易な網や電気柵に、弓矢や落とし穴などでの狩猟が、銃器や箱罠に。また、イノシシオドシが発光装置などに変わったくらいで、基本的防衛面では古代と大きな変わりはありません。

大きく変わったのは、森林や農地周辺の環境です。田畑が後継者不足のため数化したことや、農業の機械化による農産物残渣などが、野生動物の餌づけとなり、イノシシの侵入の原因になっていきます。

田畑の敷化がイノシシに安全で落ち着ける場所を提供して、機械化によるロス・農産物残渣などが、野生動物の餌づけとなり、イノシシの侵入の原因になっていきます。

特に敷化した耕作放棄地は、イノシシの絶好の隠れ場になります。イノシシは、私たちが思っている以上に臆病で、とても警戒心が強い動物で人間を怖がります。

そんな性格のイノシシが、なぜ人間が活動する畑や田んぼに出ようになったのでしょうか。一番の原因は、イノシシが安全と感じ落ち



「アライグマ」農水省HPより

着ける場所が、農地周辺に増えてしまったこととです。耕作放棄地に草が生い茂り、イノシシにとって快適な場所になっていきます。

近年、人間界と野生動物生息域はかつてない程接近してきて、実際、屋間は集落にある小さな耕作放棄地の中に住み、夜はその周辺の田畑で腹を満たし、朝になるとまたそこに帰って寝るといいうイノシシが増えています。

敷や耕作放棄地を放っておくことは、イノシシをどんどん引き寄せることになり、防護柵などを設置しても効果がありません。

耕作放棄地の再生・保全管理に努めながら、農地周辺から草の生い茂った場所を少しでも減らすことが、イノシシ対策の第一歩です。

先月号の本紙でも取り上げましたが、近頃アライグマによる被害情報が目立って多くなりました。

分布は徐々に全国的に拡大しています。寿命は野生下では5年程といわれています。茶褐色で尾に際立ったシマ模様があり、顔の黒模様が左右につな

がって、体型は猫ほどの大きさです。交尾期は1月～2月。出産期は3月～4月で、3～6匹出産します。

また、妊娠に失敗したり子どもが死んだ場合には、夏から秋に再度交尾・出産することもあり繁殖率は旺盛。食性は、幅広く、季節毎に利用しやすいものを採食していると思われ

ます。被害が多発する季節は春から秋頃で、冬眠はしないが、冬は活動量が減ります。

夜行性で人目に触れることなく夜間に活動するため、被害状況も屋間畑に行つてはじめて気づくことが多く、

有害獣の特定が困難。器用な前肢を持つため、スイカなどの皮にピンポン球大の穴を開けて中味だけを食べた

## アライグマハクビシ 基礎知識

アライグマは、タヌキやキツネなどの日本の在来動物とは異なり北米大陸が原産で、ペットなどとして日本国内に持ち込まれた外来種で、現在、特定外来生物に指定されていて、

り、トウモロコシの皮をむいて食べるなど、アライグマに特徴的な加害形態があり被害を見分けるポイントとなります。

アライグマと体型・習性や被害形態のよく似たものに、ハクビシンや在来動物のタヌキやアナグマがおり、加害獣の特定は非常に困難です。

ハクビシン（白鼻心）は、ほぼ全国的に生息していて、外来種か在来種であるかについては諸説があり、未だ断定されていません。

共に活発に活動をはじめます。食性は雑食性で、果実やトウモロコシなどの野菜、小動物、昆虫、鳥類やその卵を食べ、加害形態はアライグマとの比較が困難なほど酷似。

毛色が淡色型Ⅱ全身の毛色が胴体と、それ以外の濃淡差がはっきりしている個体と、暗色型Ⅱ全身がほぼ同じ暗い色に見える個体がい



アライグマ被害 7月27日矢川で撮影 農水省HPより

尾が長く胴体に匹敵するほどで、電線の上を尾でバランスをとりながら移動することができ

ます。アライグマ・ハクビシンは、1日でも垂直ジャンプができ、木登りも得意なため、

困りやすいのが、電線の上を尾でバランスをとりながら移動することができ、木登りも得意なため、

日本在来の野生鳥獣の管理のように被害を防止しつつ保全を図るのではなく、完全排除が基本です。

基本です。各地域では生息域拡大を防ぐために、罠による捕獲が盛んに行われていますが、人にも感染する感染症を保有している可能性があります。十分な注意が必要です。



「ハクビシン」農水省HPより

アライグマと体型がよく似ていますが、名前の通り、額から鼻にかけて白い線が入っているのが大きな特徴。繁殖期は早春と晩秋に多く見られ、地域によっては年に2度繁殖することがあるそうです。妊娠期間は2ヶ月程で、普通は2～3匹を出産し繁殖率は高い。



アライグマ足形 8月10日矢川で撮影 農水省HPより

つながらる恐れもあり、早急な対策が必要。外来生物の防除では、日本在来の野生鳥獣の管理のように被害を防止しつつ保全を図るのではなく、完全排除が基本です。

名張鳥獣害問題連絡会セミナーにおけるアンケートその2の集計

地域別回答者数

- Q1 錦生地区14 赤目地区1 比奈知地区4 箕輪地区2 つつじが丘8 宇陀市2 その他市内外5 無記入16
  - Q2 獣害が酷くなったのは何年前？  
5年17 10年19 その他8
  - Q3 今最も困っている鳥獣害は？  
サル36 イノシシ25 シカ38
  - Q4 人身被害はありましたか？  
あった1 無かった44
  - Q5 住宅被害ありましたか？  
あった26 (屋内侵入・瓦など) なかった20
  - Q6 防護柵設置の勉強会など行っていますか？  
行っている14 行っていない30
  - Q7 集落外周の防護柵に管理道はありますか？  
ある21 ない20 ない所が多い10 柵がない2
  - Q8 所有者の異なる農地で協力して防護柵を設置していますか？  
している23 していない20
  - Q9 集落を餌場にしないうために全ての畑を囲んでいますか？  
囲んでいる8 囲んでいない34
  - Q10 追い払いは、みんなで行っていますか？  
行っている14 行っていない10 個人で行っている19
  - Q11 サル情報活用していますか？  
している24 していない20
  - Q12 果菜類は動物に見えないように作付けしていますか？  
している24 していない20
  - Q13 緩衝帯の設置は進んでいますか？  
進んでいる6 進んでいない31 整備中1
  - Q14 近所の里山の状態は？  
整備できている7 荒れ放題35
  - Q15 野生動物との棲み分けは出来ると思えますか？  
出来る5 出来ない15 出来るが時間がかかる29
  - Q16 非農家の参加や交流はありますか？  
ある18 ない24
  - Q17 補助制度など効果的に活用していますか？  
している12 していない16 分からない14
  - Q18 今後、このような研修会は必要と思えますか？  
思う47 思わない0
- ※アンケートその1のまとめは次号に掲載。

# B群今後の対策

矢川付近では、モンキー、ドッグ導入以後、サルによる被害が大幅に減少し、ここ4～5年はサルによる被害は全くありませんでした。ところが、

大量捕獲直後の4月頃からゲリラ的被害が増加しています。名張B群は大量駆除により、群れの社会構造を支えていた、リーダー的なメスサルがいなくなり群の社会構造が大きく混乱していると思います。

統率者不在で、人間界でいうならば、戦国時代の「下克上」状態になっていると想像されます。

個体数が大幅に減少していますが、被害状況には大きな変化はみられず、当初、期待をしていたような効果があるか、どうかは現状をみる限り疑問です。

このままで推移すると、群の回復は、時間の問題です。元の頭数に回復したときが心配されます。

全国各地でも、全頭捕獲、大量捕獲が実施されていますが、よい結果が得られていない、もの長きに亘り被害が

が危惧されています。アライグマは、狩猟が認められていますが、狩猟には、狩猟免許が必要ですが、農作物や生活被害を発生させている個体に限り、狩猟免許が無くても自治体の許可を受けたうえで捕獲することができま

ハクビシンも狩猟獣です。だが、外来生物法の基準となる明治以降に移入されたことが、確定できないために法的に駆除対象となっておりません。

同じことが心配されています。B群は現在、10頭前後の集団ですが、その他に集団から離れて集団に追いついている数頭のハナレサルがいます。これが以前からの問題児で、彼らの行動域は群の行動域を遙かに超えた広域を自由に遊動している、人慣れが進み各集落の餌場など、全ての環境を熟知している、中には人の顔ま

## 草刈り時期を遅らせる

# シカ対策

秋はイノシシやシカの繁殖期です。厳しい冬場を乗り越えるためにも多くの餌が必要になります。

山に餌の乏しい冬場、集落で青草などが繁茂していると、イノシシやシカたちが集落へ出没するようになります。これが「餌付け」で、農作物の被害につながっていきます。

冬場は枯草しかない状態にしましょう。

秋はイノシシやシカの繁殖期です。厳しい冬場を乗り越えるためにも多くの餌が必要になります。

山に餌の乏しい冬場、集落で青草などが繁茂していると、イノシシやシカたちが集落へ出没するようになります。これが「餌付け」で、農作物の被害につながっていきます。

冬場は枯草しかない状態にしましょう。

無かった地区に、大量捕獲後、被害が開始したというのは、群の社会構造に大きな変化や問題が起こっていることが予想されます。

今後は、各地域と連携をとりながら、今までの対策強化に努めなければならぬと考えます。

近頃、農業形態の変化で収穫時期が総体に早くなっています。水稲でいえば、刈り取り時期が9月中旬になり畦畔の草刈りは、9月上旬に行っています。そうすると山に餌の乏しい冬場1月～2月の厳冬期、畦畔に青草が繁茂しシカやイノシシの餌場になります。

また、稲の「ひこぼえ」から出穂した籾はイノシシの好物になります。稲刈り後、機械化の「ロス籾」が芽を出します。これもシカの大好物。

稲刈り後は、できるだけ早く秋耕を行い餌にならないようにしましょう。

野菜の収穫残渣も冬の貴重な餌です。収穫時に発生する残渣はすき込むなどして、餌にならないようにしましょう。生ごみも放置せず、コンポスト容器などを使って堆肥にしましょう。

収穫が終わった後の、柵の点検・管理も欠かせない大事なことです。畦畔の草刈りや秋起こしなどは、地域ぐるみで行わなければ効果は期待できません。

このようなチヨット稲株からは稲の「ひこぼえ」が生えてきます。生え始めの柔らかい草はシカの大好物。

また、稲の「ひこぼえ」から出穂した籾はイノシシの好物になります。稲刈り後、機械化の「ロス籾」が芽を出します。これもシカの大好物。

稲刈り後は、できるだけ早く秋耕を行い餌にならないようにしましょう。

野菜の収穫残渣も冬の貴重な餌です。収穫時に発生する残渣はすき込むなどして、餌にならないようにしましょう。生ごみも放置せず、コンポスト容器などを使って堆肥にしましょう。

収穫が終わった後の、柵の点検・管理も欠かせない大事なことです。畦畔の草刈りや秋起こしなどは、地域ぐるみで行わなければ効果は期待できません。

このようなチヨット稲株からは稲の「ひこぼえ」が生えてきます。生え始めの柔らかい草はシカの大好物。

### サルの出没状況

名張A・B群

8月のサルの動向

A群は、先月の後半から善導寺・比奈知の各ダムにはあまり滞在せず、つつじが丘北8・10番町

指導員報告

平成28年8月のサルの動向

A群は、先月の後半から善導寺・比奈知の各ダムにはあまり滞在せず、つつじが丘北8・10番町

毎度、ご愛読いただいていることを、お礼申し上げます。

総論的な記事が多くなり反省しています。これからは地域を巡り、皆さんとのコミュニケーションを深めながら、地域に密着した具体的な情報をお届けしたいと思っています。

本紙に対するご感想、ご希望、ご提案などあればご提示下さい。

(連絡先は、1面上右に記載してあります)。

編集局より

主に、国道165号線の南側を中心に活動しているように思います。

※矢川では、8月中旬ハナレと思われる被害がありました。

ここ最近、上長瀬まで移動し、これ以上奥に行くこと山深く発見が困難になります。

B群は、先月後半から、赤目町長坂から竜口・宇陀市の室生西谷・室生滝谷にかけて頻繁に行ったり来たりを繰り返しています。A群に比べて被害の報告は受けていません。

- 発行部数
- 錦生地区：100部
  - 赤目地区：200部
  - ひなち・富貴ヶ丘：200部
  - つつじが丘：430部
  - 箕輪地区：80部
  - 市民センター：120部
  - 名張市議会：20部
  - 名張市役所：20部

